

祭典作法  
全

特57

892

X

X

014067-000-1

特57-892

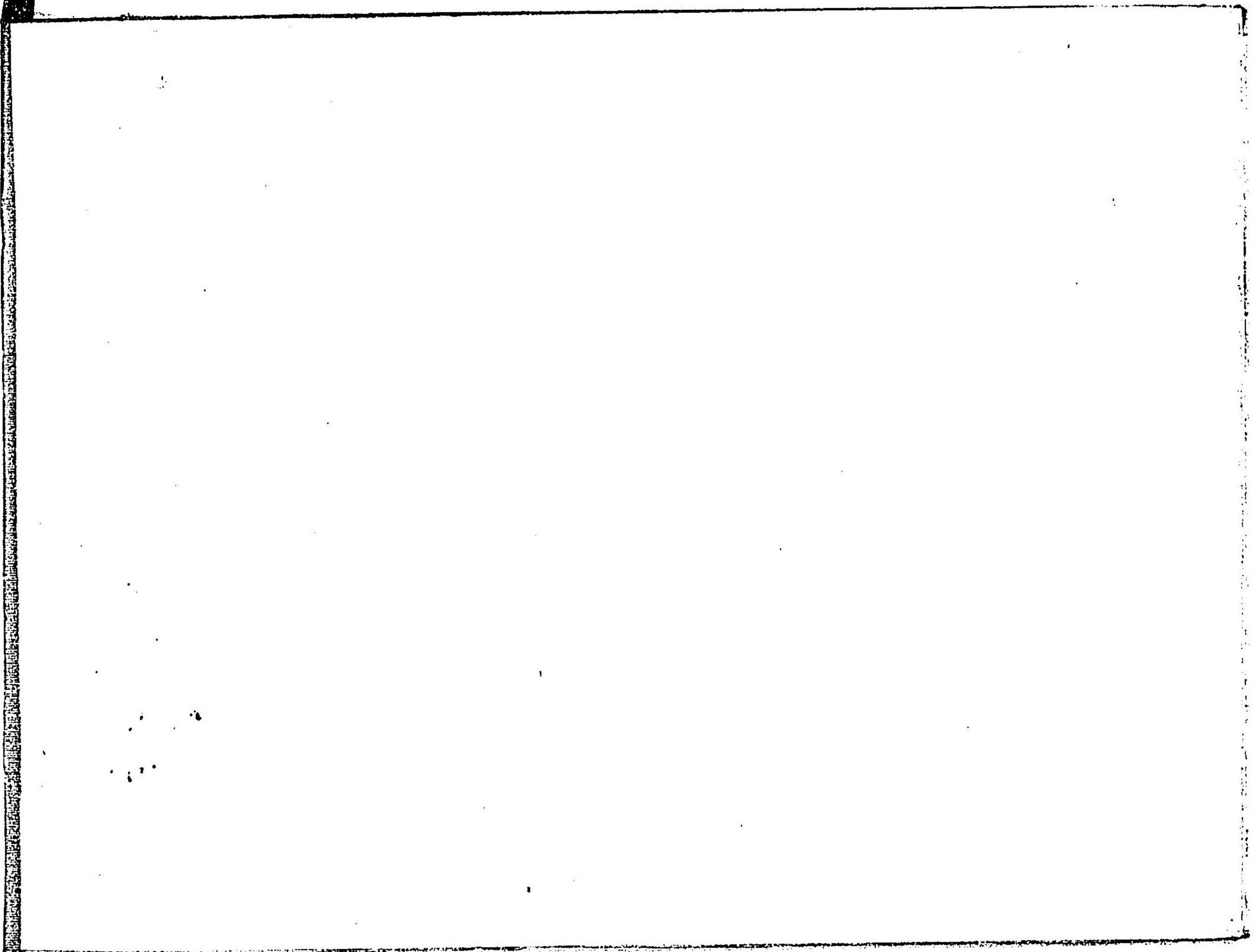
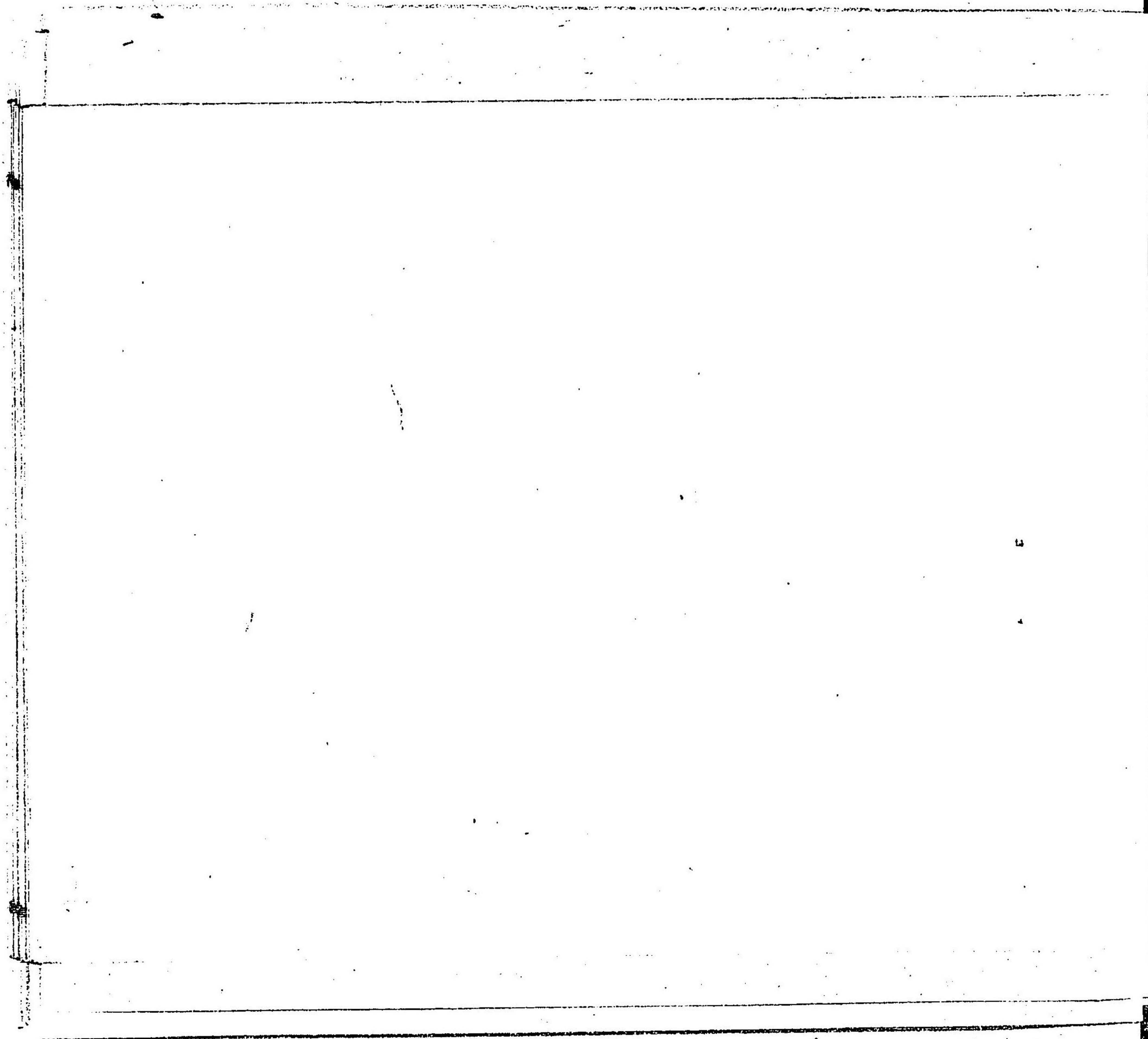
祭典作法

冷泉 為記/著

M17

ABB-0323





祭典作注之端文

我名延余去人我輩尔古學令

奉仕給布服神乎拜者如此

為流敏敏敏敏敏敏敏敏敏敏敏

布乎伊加傳忘禮士登豆其時

時下認置之象必是有事成倚良

比都冬師大人尔見世奉禮斯加

溪以者最克記為里然禮序深毛

考用傳其時之思布儘乎尔世志

有溪人尔莫令見曾登官給比斯加

婆文匣迺尔秘持之毛考那用

見礼溪早三年前乃事登波成

收。能留乎。此度我学能兄弟在  
流。横經志伴。伴加傳板尔彫刻期  
豆。遠方田舍能。初學爲流子等尔。  
與那婆。最善在武登。思比發形豆。  
師大人尔。此由乞申世傳。左毛右毛  
聖宮能波爲流尔。甚久打悦備豆。初  
学能人母。預尔悟留陪久。俚言段豆。  
公尔願申之喚雞。遠尔板尔彫事  
冬波能收。時者明治十餘七年一  
月。如斯言者此大人尔物學布

宇野豊道

祭典作法

從四位藤原朝臣爲紀著

笏シヤク 扇シヤクよて外同一

笏ハ常に右の手よ持ち寄り偕て拜  
のときハ勿論被戸又ハ神前より列  
せば両手よて持ち臍のあまりへ  
當つ登一是を正笏シヤクシヤクと云

揖

揖とハ両手よて笏を持ち臍のあ  
たりへ當て、腰を折るまゝ○拜  
と揖とハ大なる違ひ有りて心  
志を誤るゝとならぬ

拜

拜とハ正しく立ち両手に笏を持ち  
ち向ふへ差出して先づ右の足を  
引了ヒキ跪き次は左の足を引了坐す  
るなり○立時ハ左は足より立つ  
べし○いづれも拜ハみも同ト出  
すなり

### 沓揖

沓揖とは其坐するトカキ軾或ハ圓坐の  
前より至両手ふて笏をもち臍のあた  
りへ當てし一揖し沓をぬぐ  
なり○又沓を着るときハ先沓を着  
き一揖するなり

### 坐揖

坐揖とは先軾或ハ圓坐より坐し笏  
を両手よて持ち一揖するなり

### 再拜

再拜とは軾或ハ圓坐より立ち笏  
を両手よて持ちながら向ふへ差出  
して坐し一拜し又立ちて笏を  
向ふへ差出して坐し一拜するなり

### 再拜兩段

再拜兩段とは右の再拜を二度と  
するなり故より四度立ち四度拜し○

二度拜し即再を一段とし

### 八拜

八拜といハ四拜即再拜を二度さる

拍手ウツシユ

拍手といハ手を打あり笏を座の右  
に置くの又ハ懐中まゝり或ハ右  
の腰よぎて打あり

短手タムシユ

短手といハ音を立ててぎりと手を打  
あり

或ハ一度打を短手と云

拍手兩段

拍手兩段といハ手を四つ打ち又四  
つ打あり四つ打を一段とさ

ハ拍手ハウツシユ

ハ拍手といハ手を八つ打ち短手一  
つ打ち又八つ打ち短手一つ打つ  
合せるとハあり

忍手シズビテ

忍手といハ葬祭の時音を立ててぎ  
りと打あり短手といハ異あり

膝行シツカダ

膝行といハ跪踞と行くことあり此  
時ハ笏を右の手に持あり

○さる拜の仕様を志るせば三つ  
あり

一先省、揖 次坐、揖 次再拜 次拍

手 次坐、揖、次省、揖あり

二先省、揖、次坐、揖、次再拜、兩段

次拍手、兩段、次坐、揖、次省、揖あり

三

三先省、揖、次坐、揖、次八拜、次八

拍手、次坐、揖、次省、揖あり

一ハ畧あり二ハ尋常あり三ハ

別式あり別式トハ皇大神宮ニ行ふ式を云

あのみ〇省、揖〇坐、揖〇拜〇拍手

〇坐、揖〇省、揖の六をあらまされ

ハ拜の式具もるま

### 平伏

平伏トハ文字の如く平らあり伏

まあり其伏状ハ坐しあぐら股を

はぢかき腹と頷とを下へ着け

あまり頭ハまげぬ状よま

### 玉串を附るま

玉串を附くるハ後取シドリの者便宜所

より玉串を左右の手ふて我左を上

下ト持出齋主或ハ副齋主の前よ

進ニ一揖して玉串を持こへ我右

下ト左を渡まべ

### 祝詞を附るま

祝詞ハまへに懐中まへ玉串の

如く持行をのみるあり神幸の時

ハ祝詞袋と云ふのあり

供物

供物とハ神饌を奉るより其奉る  
状ハ高杯ふらむ左の手よて柄を  
にぎり右の手よるふちをりちて  
次々よ傳供まべ

○三寶ふらハオヤユビ大母指ドサシビと食指シサシビとふ  
るふちをりち中指ナカユビと無名指ヘニサンユビと小  
指よを穴のところへ入て持べ

○手よる奉る高杯又ハ三寶時ハ  
左の手を土器の下へ入せ右の手  
を持添ふる○瘡カサを持状も同ト

齋主心得

齋主ハ祭典役員中の重任ふれハ  
心を静め萬事整肅よま

○祝詞を白む時ハ懐中よる祝詞  
を出し我左の方よて開き二つふ  
折り一拜し開き少しうつむき  
ま白まべ扱白し終らバ又我左  
の方よて巻き懐中まべ委くハ  
中祝詞を白処と  
考へ合まべ

副齋主心得

心得齋主よ同し

後主心得

後主ハ後詞を白むとき齋主の後  
詞の作法よ同ト但し後詞を少し  
高く差あげま白ま



○後詞ハ成るべく諳誦の方より  
一但一諳誦のときハ正笏をべし

### 大麻者心得

大麻ハ神饌以下を被清あるもの  
ふせバ心を清くし被ふべし

○本儀ハ一人づ、被ふべし

### 鹽湯者心得

大麻者ふ同ト

### 傳供長心得

傳供長ハ神供を備ふる者ふれを  
専ら注意し饌を穢とざる様よを  
盡し

○奉置順序ハ左の図の如し社但各  
社旧

式あるハ勿論旧  
式を以ふべし ○瘧の覆を取ら  
とふ  
られ

○彦神ハ酒を先よ奉り次よ米を  
奉る盡し

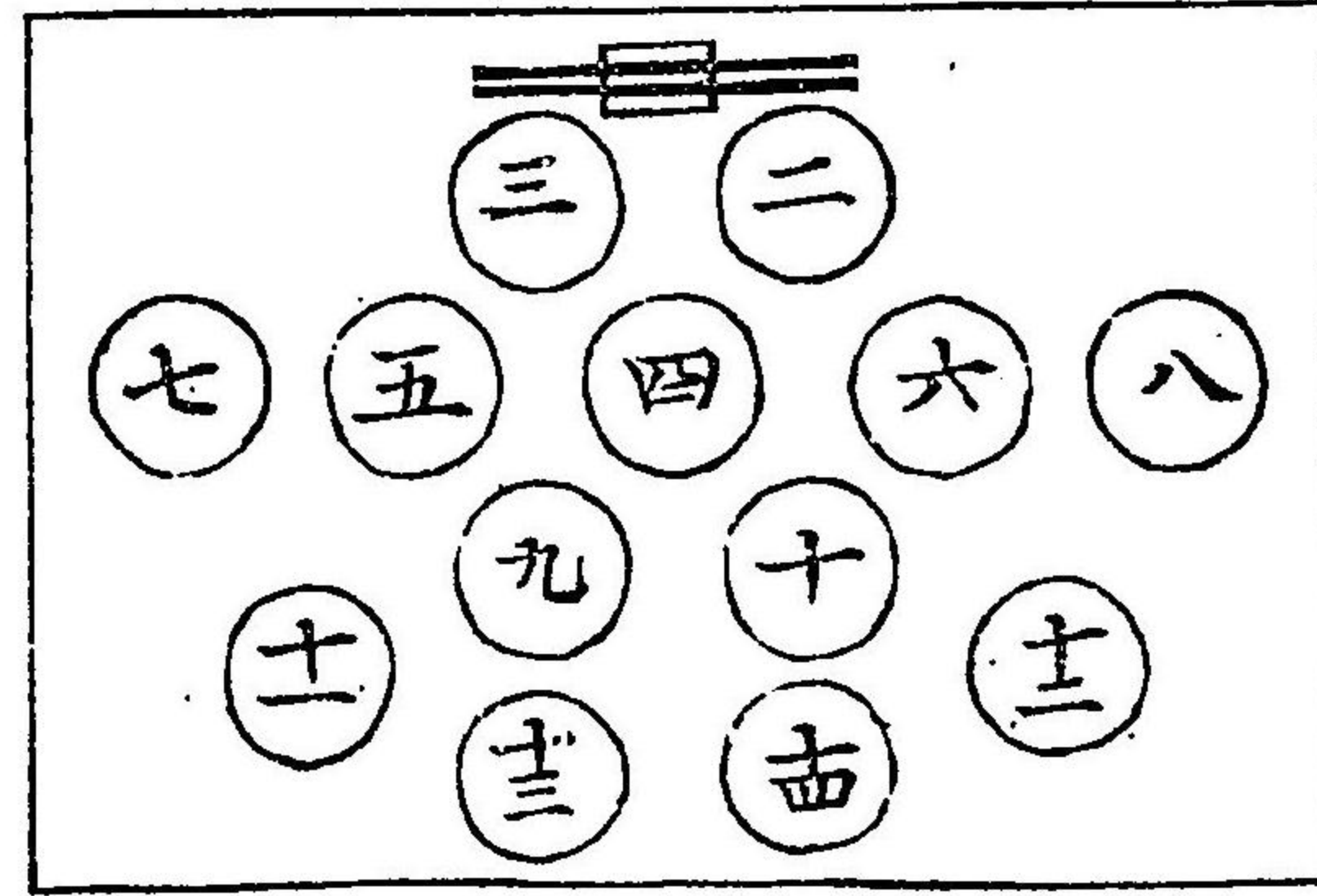
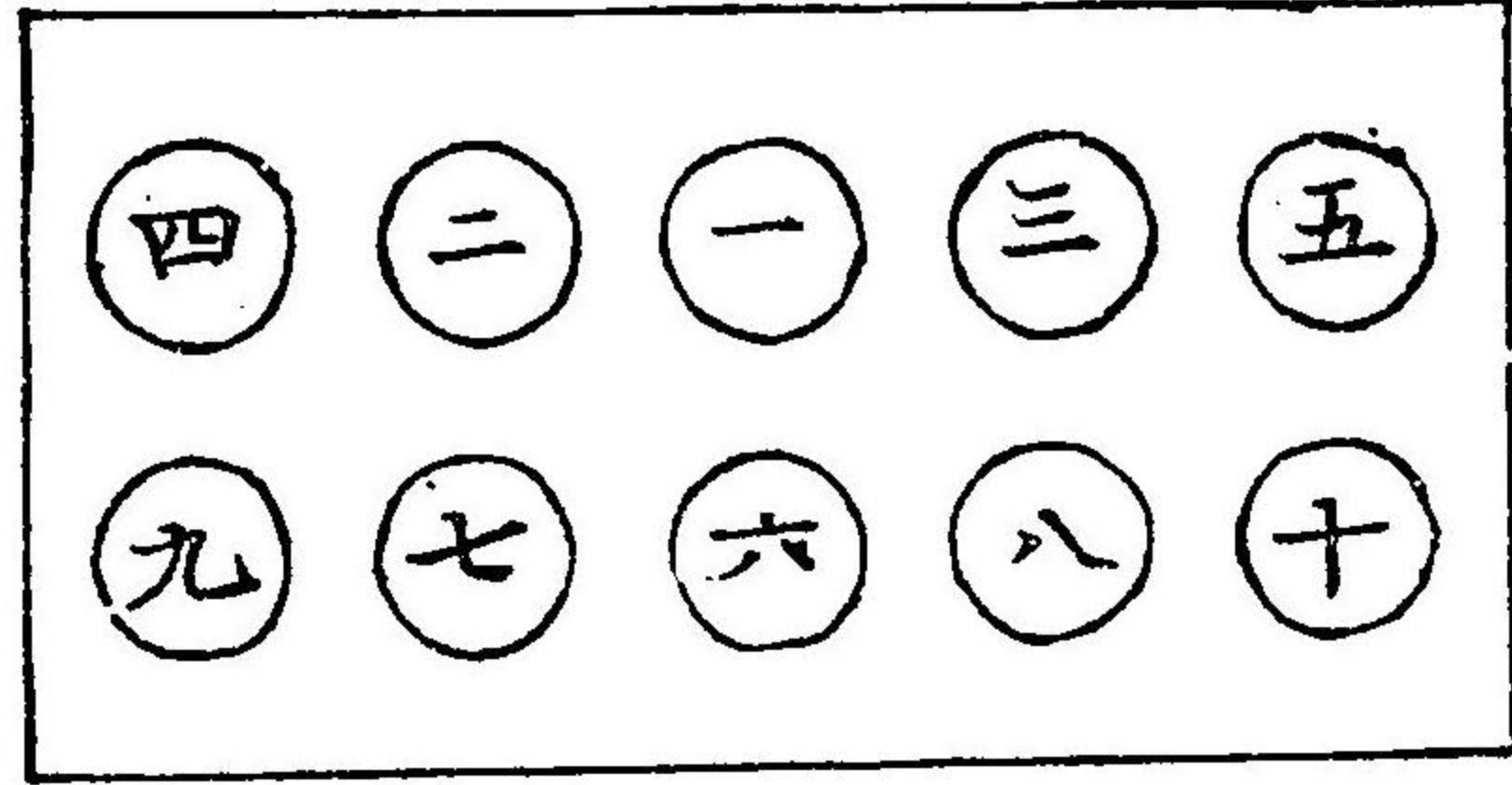
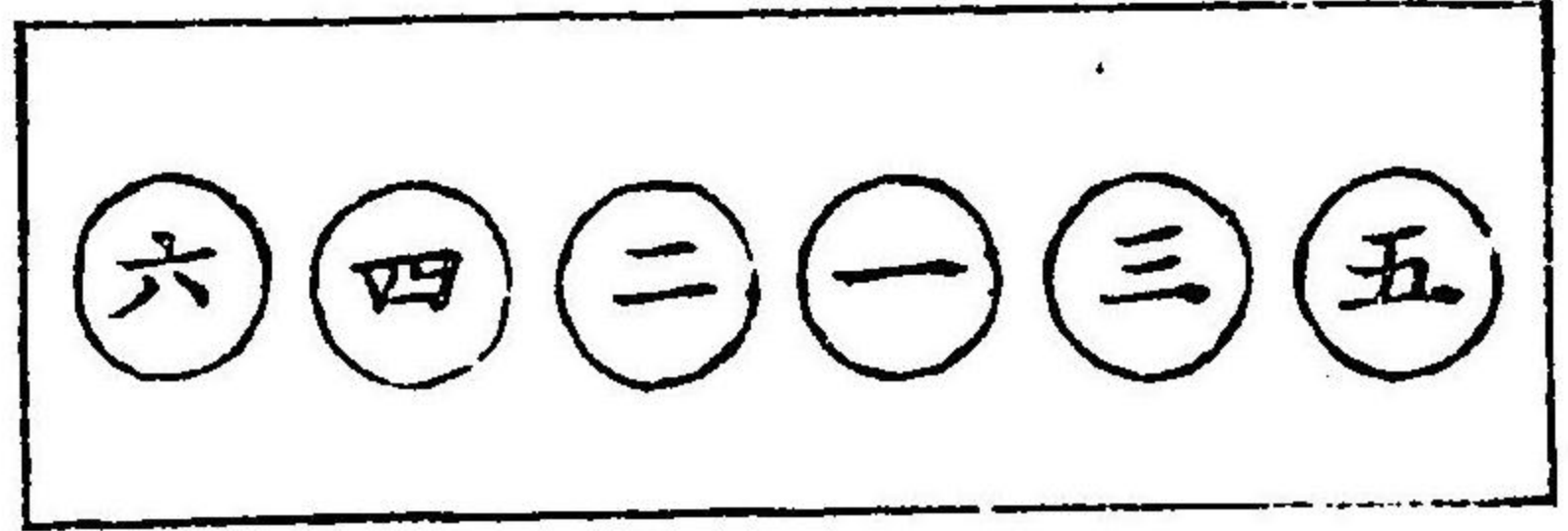
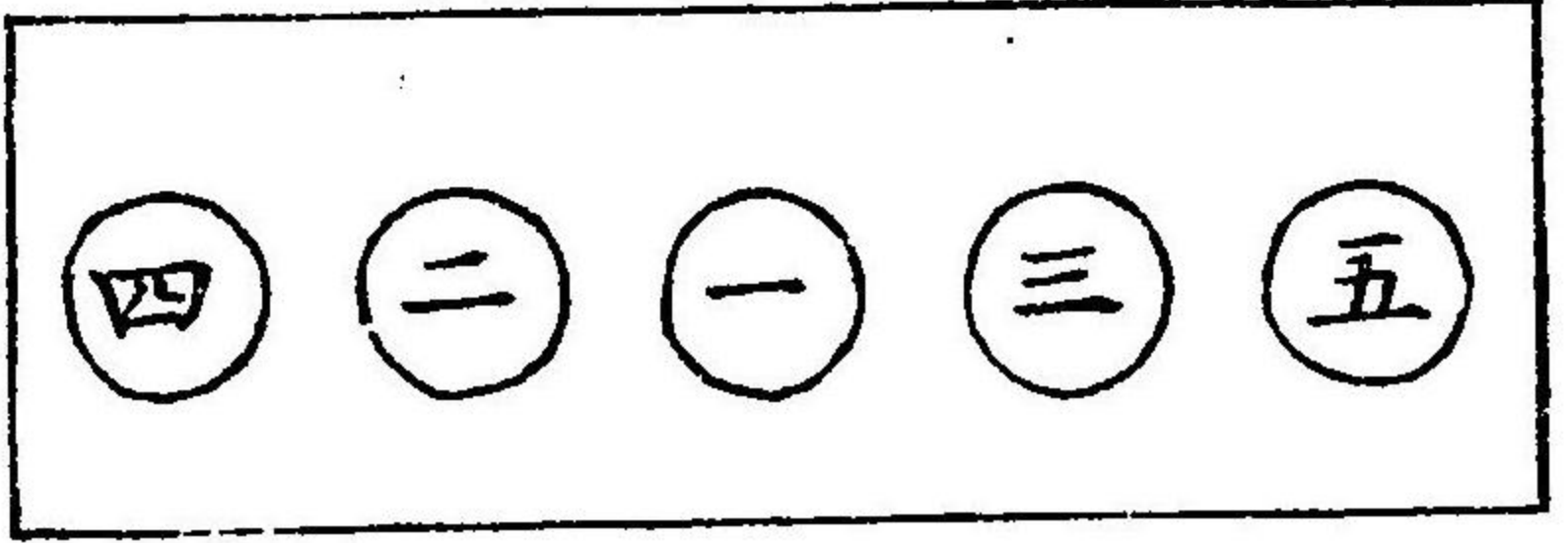
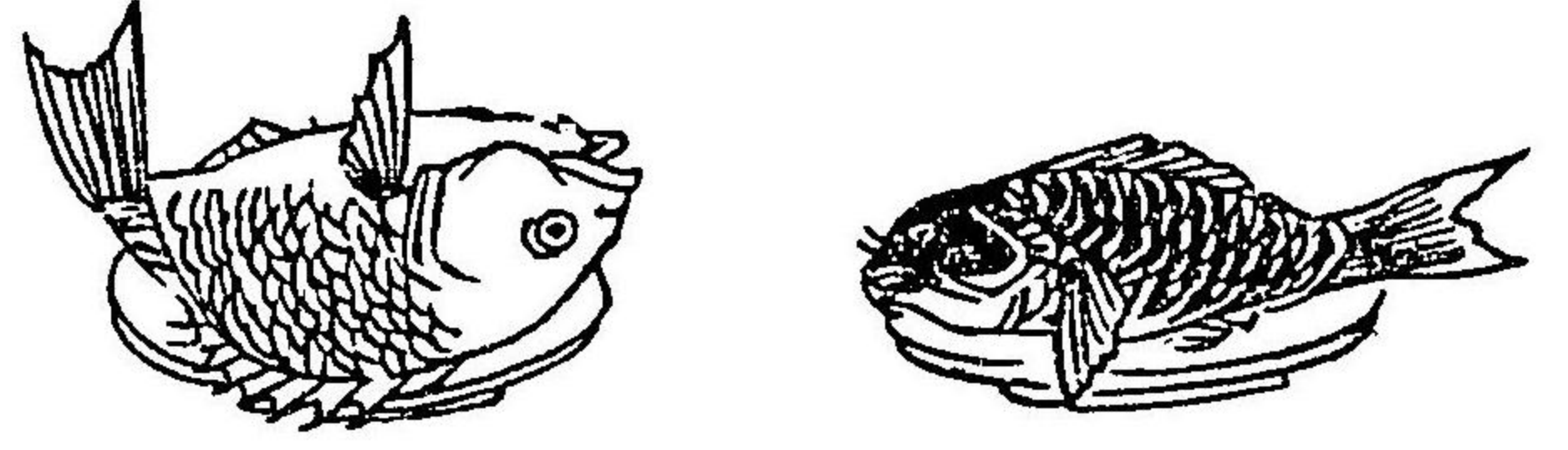
○姫神ハ米を先し酒を後よを  
盡し

○魚の奉り状ハ川背海腹といふ  
て図の如く奉るべし

### 奏樂

奏樂ハ開閉扉及神饌供撒の間奏  
盡し

前神



庭上尋常祓式並ふ祭式

祓式

高案よ大麻鹽湯を置下よ  
薦を敷

先齋主以下祓戸ふ列立

齋主以下正笏し立

扇を持  
おとあ

同ト

次祓主祓の詞を白

祓主一揖し高案の前よ進

と一拜し再拜兩段拍手兩段一拜

し笏を持ふから右手を懐中へ

入後詞を取出し笏を持添ら

る讀白を終りて巻き笏を取添て

懐中を懐中し再拜兩段拍手兩段

一拜し退き本坐よ復し一揖

次大麻行事

大麻者一揖して高案の前より進み  
一拜して笏を腰の右より取り大麻  
を取り我左の方を上とし右の方を下とし先神饌  
所に至り神饌を左右左と拂ひ次  
に齋主已下の前より至り左右左と  
拂ふ終りて大麻を高案の上より置  
本坐より復し一揖をいづせり立る  
から拂ふなり

次鹽湯行事

鹽湯者一揖して高案の前より進み  
一拜して笏を腰の右より取り鹽湯  
の壺を取り両手にて持先づ神饌

所に至り鹽湯の壺を左の手より持  
右の手より神の小枝を取り鹽湯  
よむたりて左の方へそそぎ又そ  
そりて右の方へそそぎ又左の方  
へそそぐと前の如し終りて壺  
を高案の上より置き本坐より復し一  
揖○立るなりはらふなり

次退出

齋主以下一同一揖し齋主より神  
前より進むなり

祭式

先齋主以下祭場より着床

齋主以下神前の右に方我左の方我左に着  
床し正笏をもみと被式列立の如

### 次開扉

齋主或ハ副齋主一揖し立ち神  
前の階下右の方我左の方へ進み一揖  
し沓の揖し斜たに階ふ昇り先  
右の方我左に向き横よに先着坐一揖し  
再拜兩段一拜一揖膝行し御扉  
の左に方我右の方我右に平伏一拜し御  
鍵を懐中より出し御錠を開き先  
右の御戸を開く可成静に開き終  
つし一拜深く謹み御戸の左に

我右の方へ膝行し左の御戸を開き  
終つし平伏一拜復坐し再拜兩段  
一拜一揖終つし始の如く階を下  
り沓を着け一揖し復床

### 次神饌を供す

神饌長一揖し立ち神前の右に  
方我左の方に進み一揖し沓をぬぎ  
斜よに階ふ昇り先我右の方我左に向き  
一拜し神前の右の方我左に  
うづまり居る

次神饌次長の者進むと神饌長  
に同し但し階の中間に跪き居る  
若し階ひくけれハ階  
下は居るよら

次傳供の者次第に進み列立し笏  
を右の手より安し居るべし但し神  
饌を受取らむるときは笏を腰  
にささべし

次は神饌所より後取の者より出  
る次第に傳送す

次は傳送終らば下郎より復床を  
次は傳供次長ハ階の中間に居る  
から一拜し下り沓を着け一揖  
し復床を

次は傳供長ハ一拜し階を下り  
沓を着け一揖し復床を

次祝詞を白

齋主立ち一揖し神前の階下右  
の方我方左へ進み一揖し沓をぬ  
ぎ斜に階を昇り靴を坐し一揖し  
再拜兩段拍手兩段一拜して笏を  
持ちながら右の手を懐中へ祝詞を  
取出し笏を持添て開き一拜一揖  
し朗稱を終りて巻き又笏を取添  
て懐中をべし扱再拜兩段拍手兩  
段一拜し終り一揖し初の如く  
斜に階を下り沓を着け一揖し  
復床を

次玉串案を置

後取者便宜所より玉串案の下へ

左の手を入右の手より案の端を  
持てへ神前より進み一揖して沓を  
ぬき階を横に昇案を置き置一拜し  
て階を横より下り沓を着け一揖し  
て退く○階下より置るより終り

次玉串を奉る

齋主或ハ副齋主立り一揖し玉串

を受取持ちて左を上より持ちこ階

下に進み一揖沓を脱等齋主階上

に昇り軾より坐し一揖

次より再拜玉串を持ち玉串の本の方

を御前の方より案上より奉り再

拜兩段拍手一段一揖して斜より階

を下り沓を着け一揖して復床し

坐し揖

次各拜禮

其時々の便宜より任むを

次玉串案を撤す

撤するはと置るときの如し

次神饌を撤す

獻饌の時より同ト

次閉扉

閉扉の時より同ト

次退出

齋主以下一同一揖し齋主より

退出す

殿上尋常祓式並祭典式

殿上便宜所は薦を置き高案一脚を置大麻鹽湯を置ると庭上式のみとくして圓坐或ハ軾一枚を以下軾とあるハみま圓坐を以てふもまゝ其高案の前よるき又其軾よりまゝさざりて齋主以下の軾を人数ほどならんを又神饌所の神饌を悉くとのへ置へ

祓式

先齋主以下祓戸は列坐を

齋主第一の軾に前よるきみ其軾

よ坐して一揖を次は副齋主以下

とも同づく坐して終る

次祓主進て祓詞を白を

祓主坐揖して立ち我軾の下シモに方

の間よりまゝみ祓戸高案の前は

軾に前よるき其軾よ坐して一揖

兩段再拜拍手一拜して祓詞を白

を其作法庭上終りて兩段再拜拍

手一拜一揖して其軾を立ち本坐

よるへりて一揖を

次大麻行事

大麻者坐揖して立ち祓戸高案の

前の軾よるき我軾の下に間をりまゝおゑと祓

主より同一下 其軾より坐し一拜し  
皆倣之 立る高案の上より大麻をとり神  
饌所より入り跪き一輯し左右  
左と右をひ終り祭員の中右と  
の前よりいたり跪き一揖し此時齋  
主以下  
頭を左右左と被ひふとの高案の  
前より入り大麻を其高案の上より  
置き軾より坐し一拜し立る本坐  
より復る

### 次鹽湯行事

此作法大麻より同一但し庭上式の  
処見合をべし

### 次退坐

祭主以下一揖し立ち齋主より  
立つべし

神前よりさむむ

### 祭典式

神前の板敷は右の方我左  
の方より齋主  
以下は軾をさく疊ふせを軾  
等より及ぶ

### 先齋主以下齋場より着坐

齋主第一の軾より進み其軾より坐し  
一輯し以下板式のおとく皆坐し  
終る

### 次開扉

齋主或ハ副  
齋主 一揖し立ち階下より  
進み一輯し階を昇り庭上式の  
処より昇る  
状をくまへり 一拜軾より坐し一揖  
両段再拜一拜膝行し御扉より近



つき御健をいぬし持あいのら一拜  
し御錠をしりき御戸の左右をむ  
らくあんど庭上式よ同ド終り  
膝行し軾よあへり西段再拜一拜  
一揖しそ階を降り一拜しそ本坐  
よあへり一揖

次神饌を供

傳供長一揖あそそみ階下よ一  
拜し階を昇り平伏あそあんどあそ  
べそ庭上式よ同し  
傳供の者一同よ一揖しそ立ち階  
下よあ神饌所あそ立ちあそひ終り  
そ其坐々々よ坐を初めハ坐し二

度めたりハ跪きあそべし其時後  
取者神饌を捧げ跪きそ一人よこ  
たを坐しあのらうけと里うけ  
あそバ直よ立ちあそと直立ち次  
の我坐よあへるあそ直立ち次  
此人の前あそ歩を跪きそあそ  
あそ次くあそ同し

傳供次長同長ハ庭上式よあそ  
事あそ奉り終りたらハ互よ見合  
せ一同よ左右の本坐よあへり一  
揖を傳供長ハ一同本坐よかへる  
を見そ一拜し階を下り本坐よあ  
へる事庭上式よ同し

次齋主祝詞を白

庭上式よかざる事あり但一當の揖あり

次玉串を奉る

此も庭上式よのなる事あり

次一同拜禮

庭上式のところよんことあり

次

大和舞よと奏まへ無一とくは  
まよたげあり

次神饌を撤さ

奉るときに如くして乙下ヲまへ

次閉扉

閉扉のくたかりを見合せて閉奉る

を

次退坐

坐の下に者より一人々々一揖を

て坐を立ち神前よむらひて一拜

するまじくべし

直會式

直會ハ舊き御社よるハ其社々よ  
とり種々のありありあせを今定  
めたるいひうたへありハ何せと  
先かゝる事よてよのらむとあ  
るみよあるま

入用の具

○ 甕一對 ○ 高杯二臺

小さきハ脚案  
あつてもよろし

○ 土器四枚 ○ 榊の小枝

先撒したる神饌の御酒を甕一  
對よりつー入又洗米を土器二  
枚よ盛高杯のうへよのせ榊の  
葉を一枚つ洗米の土器よ添

え置く

さる旧社よる直會殿とてある  
へられと無き所よるハ便宜所  
を直會所とて左右よ載せしき  
齋主次下一同の坐とて

先齋主以下着坐を

齋主以下一同載せ坐し一揖し

正笏を

次一獻

後取者二人盃一杯つゝをもち齋  
主副齋主の前よ進み跪き其盃を  
進む齋主副齋主笏を置き盃を受  
取し一揖を盃をもち者退く左

右の坐は後取一人つゝ進む以下  
 之如同一次後取二人甕をもちて  
 一箇進み御酒を酌む齋主副齋主  
 主其盃を捧ぎ飲み終り又盃を出  
 ぎ又酌む齋主副齋主其盃を酒を入し  
 次の人へ附し一揖を次の人其  
 盃を受取捧げて飲み終り又盃を  
 出さ後取酒を酌む其盃を酒を入し  
 次の人へ附ぎ次より如同一終り  
 の人飲み終り盃を下し置此時く  
此時取退く一同正笏し一揖を後取  
 進み其左右の盃を取りて退く  
 次御饌を進む

後取者二人高杯一盞をもち左右  
 置齋主副齋し左右一揖後取者柵  
 の葉をとり米をまくひて出さ齋  
 主副齋主手をいぢり受喫を次  
 へ皆同一終りの人喫し終る此時高  
杯をも退く一同正笏し一揖を

次二獻  
 一獻のときも同一

次發歌

此のときハわらみきまはしやま  
 となる云くおうぬをうたふ  
 或ハ東遊ちよもよ

次三獻

一獻のときよ同一

次退手をうつ

一同笏を下よ置手をニツ拍正笏

しよ一揖を

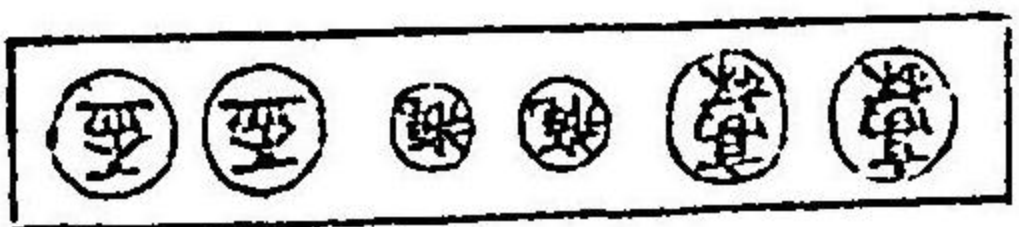
次退散

齋主をうつ一揖しよ退く次よしよ

同一

後取

後取



鹽湯 四

傳供 四

大麻 三

傳供 三

袷主 二

傳供長 二

齋主 一

副齋主 一

左

右

祭典作法 終

祭典作法の跋

此は予の聖典を道許行しよ我の如く  
もの持者とて示せらるるに於て  
世に於て祭典の事なきを詳らふに記せ  
難きなり是を如何に物に於て  
るに問ふを志師の如く答へ  
るに於て一とて記し置らるる  
よ已に撰述し見せし思ふよ其法よ是  
きに近鄰の人の拜揖せんとの別  
を以て誤り指す事なきに於て  
殿とて事なきに知らるる人に  
と聞けを是に依り言ふ事ありと  
て於て人々を示せたる最便に於て

らむとんつきと豊道は誤らよと  
多然にあまんと我師の人よ勿示せよと  
宣は志を以てのよ為むと云をうと小  
然ハ阿婆とまつ師夫人よ乞白とむ  
と云と語共よ師夫人許泰りとは由  
請白せよぬ何よ思をそりやあらん  
思ひのおよ鬼も角も為よと宣せよ  
よ高むはとまうと速く池村邦  
則よ議り即るかく多よのせよ  
う理説は書の内容一編由をありの  
傳よ書記しよ志りかきと為ぬ  
明治十七年との上年の  
三月の月  
横山經忠  
しる

明治十六年十二月廿四日版權免許  
全 十七年三月十五日刻成發兌

定價十二錢

京都府華族

宮内省御用係

著者 從四位 冷泉為紀

上京區第十組玄武町  
四番戸

京都府平民

御装束師

出版人 池村久兵衛

上京區第廿八組町頭町  
廿八番戸

東京

新葉社  
吉岡十次郎

大阪

柳原喜兵衛  
藤原熊太郎

京都

杉本甚助  
川勝徳次郎  
田中治兵衛  
西川治助



